

学校に関わる獣医師の相談ネットワークから 多頭飼育を当然としている学校に接して

中川美穂子

1 はじめに

北海道から沖縄まで、各地の獣医師会の学校飼育動物担当者とその問題に興味のある開業獣医師を中心としたメーリングリストがあります。現在780名ほどになっていますが、そこで様々な情報が交換されています。

6月にそのMLでやりとりされた事例からお知らせします。みな熱心で多くのやり取りがありました。その中からいくつかお知らせします。

2 地方の県獣医師会担当からの相談

県畜産課の事業“農楽の先生”に協力して小学校へ学校飼育動物ふれ合いの訪問授業を行っています。

その中で申し込みのあったある学校に、先日事前打ち合わせに伺ったのですが、その学校の飼育状況は、広い飼育場に25羽ほどのウサギがいて、繁殖期には多いときは60羽ほどになるが自然淘汰され30羽前後で落ち着いているということです。

私どもの委員が全頭去勢を勧めましたが、学校はあまり殖やしたくはないが、毎年繁殖させて子ウサギを子供に見せたい。学校は可愛い動物がたくさん飼っていることに意義があると考えているようで、数をあまりへれすのにも抵抗がある。多頭飼育なら死んでいっても数でカバーできる。雄雌を分離飼育するのは難しいということです。

そして、増えたウサギを近隣の小学校に譲っており、もらわれたウサギが2～3年で死ぬので、その供給源となっているという意識も強くあるようです。

よくある、学校飼育が負担でやめたいということだけでなく、信念を持って飼育をしている

ようなので、考えを変えてもらうのは時間がかかりそうです。

この学校の先生は、動物を可愛がって(愛して)育てたことが無いのではないだろうなと言う感想を持ちましたが、どのよ

うに対応しようかと悩んでおり、ご意見をお聞きかせ下さい。

3 多数のアドバイスから2例

*中川：まずは相談に乗りながら、他の学校の成果の絵などを示しながら

・愛情をかける丁寧な飼育の児童への効果(事例)

・飼育動物はすでに自然の中にいるのではなく、管理が必要

・愛護の問題、社会から攻撃をうける危険性大

・そして、多頭飼育の不潔さ(すでに病気が入っていないか?)

・餌代のコスト過剰(は問題ではないのでしょうか)

などぼつぼつと、熱心に語りかけ、信頼関係をつくりながら、「笑い声の漏れる飼育」(つまり世話の大変過ぎない飼育)にすることを勧めてみたらいかがでしょうか。
*〇〇県獣医師：2例を報告させていただきます。

<A小学校>

ウサギ3羽 ニワトリ2羽 飼育

動物愛護団体所属の保護者が、飼育状態が悪すぎるとして県保健所、獣医師会へ写真を送付しました。

「学校の対応が悪ければ、マスコミ等へも写真を送る。」といった内容の手紙が添えられていました。

獣医師会として学校を支援するため、A小学校へ事情を伺いに行ったところ、「どこの誰かわからん奴に関係ない!帰れ!警察呼ぶぞ!」と校長先生から一喝されました。

「私は学校を告発しに来たわけではありません。校長先生の味方です。一緒に解決していただけますか?」と何とか話だけでも聞いてもらえるようお願いしました。

その後、教育委員会からの口ぞえもあり、飼育舎の改装や飼育方法の指導等に何度か足を運び、手紙を送付した保護者にも納得

していただきました。

職員室に響き渡る大きな声で怒鳴られた事は、何度も経験できるものではありません。

< B小学校 >

ウサギ 60羽飼育

獣医師である保護者から連絡を受け、小学校に出向きました。

老朽化した飼育舎にウサギがあふれていました。

飼育委員会の児童が、ウサギの頭蓋骨を投げたり踏みつけたりして割っていました。

担当教師は 365 日、一人で休みなく学校へ来ては飼育舎の清掃（といっても糞便を飼育舎の隅に山のように積むだけ）、60羽には到底足りない餌やり、死体の処理をしていました。

保護者から苦情も出ていたようですが、担当教師の信念(?)で地獄のような状態が続いていました。

正攻法では難しいようでしたので、担当教師に「たまにはゆっくり家で過ごしませんか?」というような飼育とは関係ない話を延々としました。

しばらくして、「正直、疲れました。」と担当教師が少し譲歩し、そこから改善計画を進めました。

2例とも獣医師として正しい判断であったかどうかはわかりませんが、誠意や熱意を伝えれば何とかかなりそうな気がします。

社団法人 ○○県獣医師会

4 相談者からの最終報告

この間相談させていただいた学校でのふれ合い教室の後で校長先生、教頭先生と話をしましたが、学校は「最近の子供は、死を理解する体験をしていない、魚が死んでもかわいそうと言うし食べるのもかわいそうという子がいる。また死んだ物がリセットすれば生き返ると本気で思ってる子もいる。その点この学校の子は(ウサギとふれあっている)、こんな事をすればウサギは死んじゃうってこともわかるし、死んだウサギを自分たちの手で埋めたりしているので死という物を冷静に受け止められるようになっていて、死を身近に体験させることで死ぬと言うことが理解できる。」とおっしゃいました。

私は「でも子供達が動物の死が平気になっちゃっても困りますよね」と言いましたらその通りとおっしゃいましたので、「無駄に子供に動物の死を見せることは無いでしょうし、病気のウサギを一生懸命治療をしてそれでも死んでしまったときこそ本当に死を悲しむ死を理解する良い機会なので、僕たちが治療をして死んでしまった場合は子供達にどうして死んだか、「死というのはどうゆうもの」かをお話にきますよ。」「この方がより効果的だと思いますが」と話をしたら、「なるほどそうですね」と聞いてくれました。

4年生が飼育の担当で、なるべくみんなが動物と接するように学年飼育をしていると言われたので、「じゃ毎年4年生になった子に話をしに来ましょうか?」といったら、「良いですね」とのことでした。

今の段階ではこれが実現するかどうかは分かりませんが、いつか是非と頼まれたら良いと思います。また「外部からの指摘などでなにか困りごとがあれば、動物の病気のことでなくて、飼育動物に関係することなら私たちに声をかけて下さい力になります」と話してきました。

ふれ合い教室は、担任の先生は(学年飼育で4年生が飼育担当)「いつになく今日はみんな良く話を聞いていました。」と言ってみえました。

いつも感じることですが、時間が進むごとに子供達の表情が良くなります。それをみて担任の先生はそれなりの評価はしてくれたと思います。

5 助言の傾向

MLに投稿されたアドバイスの中には、「社会からの非難をうけるだろうから、直ぐに申し入れて改善すべき」「学校が理解しないなら、教育委員会と相談すべし」との強い意見もありましたが、学校が理解しないままでは良い結果は生まれまいだろうというのが大方の意見でした。

「直ぐにすっかりよくなる」とはいきませんが、今年より来年、良い方向になるように、全国の獣医師が祈っているところで

(全国学校飼育動物獣医師連絡協議会主宰)